

国際言語文化学会

日本学研究

第11号

Japanology

Eleventh issue

論文

登山鉄道による観光空間の再編とアクターの翻訳プロセス：

生駒山と箱根山におけるナラティブの変容を中心に

・・・・・・・・・・ 堀口 朋亨・村山 弘太郎・森田 卓哉・影浦 亮平

日本語の「ちょっと」とそれに対応する中国語表現

—日本語教育への応用に向けて—

・・・・・・・・・・ 王 梓洋・辻 周吾

『国際言語文化学会 日本学研究』第 11 号 巻頭言

今年度も『国際言語文化学会 日本学研究』を発刊することができました。ご支援をくださっている研究会関係者の皆様、京都外国語大学国際言語平和研究所の皆様、その他多くの方々に心から感謝を申し上げます。本号で第 11 号となりました。様々な物ごとが目まぐるしく変わっていく中で、本ジャーナルの発刊の継続がまずは大事であると思っています。京都外国語大学のアイデンティティである言語と文化の研究に関して発表したり交流したりできる環境の確保に、本ジャーナルの発刊を通じて、引き続き貢献していきたい所存です。

今年度の研究会の活動に関しては、「日本語・日本語教育研究会」で研究会を 1 回実施し、また、「カルチュラル・スタディーズ研究会」との合同研究会を 1 回実施しました。例年よりも実施回数が少なくなりましたが、研究会そのものはどれも盛り上がり、有意義なものになったと思います。

次年度も、年度末のジャーナルの発刊をゴールとしつつ、研究会や講演会の開催を通じて、研究発表・意見交換・交流の場をつくり、そして楽しく充実したものにしていければと思っています。引き続き、ご支援を賜れますと幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。

日本語・日本語教育研究会 副会長

「国際言語文化学会 日本学研究」編集委員 影浦亮平

国際言語文化学会日本学研究第 11 号

目次

登山鉄道による観光空間の再編とアクターの翻訳プロセス：

生駒山と箱根山におけるナラティブの変容を中心に

…………… 堀口 朋亨・村山 弘太郎・森田 卓哉・影浦 亮平 … 1

日本語の「ちょっと」とそれに対応する中国語表現

—日本語教育への応用に向けて—

…………… 王 梓洋・辻 周吾 … 17

International Society of Language and Culture

Japanology Eleventh issue

Reconfiguration of Tourism Space and the Translation Process of Actors via Mountain Railways:

Focusing on Narrative Transformation at Mt. Ikoma and Mt. Hakone

..... Tomonaga HORIGUCHI • Kotaro MURAYAMA • Takuya MORITA •

Ryohei KAGEURA 1

The Japanese Word “Chotto” and Its Corresponding Chinese Expression:

Toward Applications in Japanese Language Education

..... Zi yang WANG • Shugo TSUJI 17

登山鉄道による観光空間の再編とアクターの翻訳プロセス：
生駒山と箱根山におけるナラティブの変容を中心に

**Reconfiguration of Tourism Space and the Translation Process of Actors via
Mountain Railways: Focusing on Narrative Transformation at Mt. Ikoma and Mt.
Hakone**

堀口朋亨、村山弘太郎、森田卓哉、影浦亮平

Summary

This paper examines how modern mountain railways reconfigured mountain tourism spaces from the perspective of Actor-Network Theory (ANT). Using Mt. Ikoma and Mt. Hakone as case studies, this study comparatively analyzes the spatial "translation process" driven by the connection between capital (human actors) and railway infrastructure (non-human actors). While the Ikoma Cable Line transformed a mountain of faith into a popular amusement space, the Hakone Tozan Railway neutralized steep terrain using switchback technology, redefining Gora as a modern luxury resort. Ultimately, this research clarifies the dynamics through which transport infrastructure rewrites traditional narratives of religion and hot-spring cures to stabilize new tourism networks.

【キーワード】 観光ビジネス、登山観光、登山鉄道、アクターネットワーク、ナラティブ

はじめに

世界観光機関（UNWTO）および国連食糧農業機関（FAO）の共同報告（2023）によれば、パンデミック前夜の 2019 年における山岳観光は、国際観光客到着数の約 9～16%を占め、市場規模にして年間 1 億 9,500 万から 3 億 7,500 万人を動員する巨大なセグメントを形成している。しかし、この「山岳観光」という語が内包する実態は、高度なアルピニズムから日常的なハイキングまで極めて多義的である。ゆえに、現代の観光資源としての山岳を再定義するためには、単なる移動統計の把握に留まらず、そこに付与される「価値」や、人々の「登頂動機」を規定する文化的メカニズムを解明しなくてはならない。本研究が着目するのは、山岳が「大衆向け観光地」へと変容する過程で生成される、重層的なストーリーテリングの構造である。例えば、1923 年にニューヨーク・タイムズ紙が報じたジョージ・マロリーの記事が一例として挙げられる。彼はエベレスト登頂の動機を「そこに山があるから (Because it's there.)」(New York Times; 1923) と断じたが、この言説の本質は、自然という物理的存在の肯定以上に、未踏の地を「征服すべき対象」へと概念化する、近代アルピニズムの動機である。つまり、登山とは身体的運動であると同時に、山に投影された象徴的意味を消費する文化的行為に他ならない。こうした山岳にまつわる「物語（ナラティブ）」の存在は、登山者

を惹きつける決定的な誘引力となる。登山者は、物理的な斜面を克服するだけでなく、その山に堆積した伝承、神話、あるいは文学的文脈を追体験することで、自己のアイデンティティを形成しているのではないか。本研究では、山岳に付随するナラティブが観光成立の核心的要因であるとの仮説を立て、聖地巡礼的な祭礼から近代文芸への昇華に至る「物語の流布構造」を分析する。さらに重要な視点は、こうしたナラティブが時間の経過だけでなく、空間を規定する「技術」によって変容するという点である。アクターネットワーク理論の観点に立てば、登山鉄道やケーブルカーの敷設は、単なる輸送手段の拡充を意味しない。それらは、かつて一部の冒険家や修験者に限定されていた「山の物語」を、空間的制約を打破することで一般大衆へと開放し、広域的なネットワークの中に再構築する媒体（メディア）として機能した。本論文では、この技術的介入が山岳のナラティブをいかに拡張・変質させたのかという点に重きを置き、考察を展開する。

1. アクターネットワークと登山観光

1.1. アクターネットワーク

価値とは、供給側が単独で創出する存在ではなく、受け手である買い手の主観や感情、さらにはその意思決定に変容を迫る外部環境との絶え間ない相互作用（interaction）を通じて生成される動的なプロセスである（堀口・村山・影浦・高浜 2022）。観光というコンテキストでは、供給と受け手が時間軸、空間軸での広がりを持ち、さらには関与者が増えるがために、このプロセスはさらに複雑化する。つまり、そこでは、人間のみならず、地域に埋め込まれた多種多様な有形・無形の資源が価値の源泉として機能しているからである（堀口・村山・影浦・高浜 2022）。したがって、堀口ら（2022）で示したように、観光における価値創造の実態を解明するためには、人間と非人間的な資源の繋がりを包括的に捉える理論的枠組みが不可欠となる。そこで、ブルーノ・ラトゥール（Bruno Latour）らが提唱したアクターネットワーク理論（Actor-Network Theory: ANT）が極めて有効な示唆を与える。ANTの核心は、近代主義的な「人間（主体）」対「非人間（客体）」という二元論を乗り越え、両者を等価な影響力を持つ存在として扱う「一般的対称性（generalized symmetry）」の原理にある（Latour 2005; 大橋・竹林 2013; 2015; 原 2021）。

ラトゥール（2019）は、意図の有無にかかわらず、他の要素に影響を与え、状況を変化させる存在を「アクタン（actant）」と定義した。アクタンは、行為の実行主体たり得る、人間だけではなく、生物、有機質、無機質、自然、テクノロジー、言語、概念などがすべて含まれる。そのため、観光地における歴史的建造物、自然景観、デジタル・デバイスといった「物」も、観光客やガイドと同様に、ネットワークを構成し価値を媒介する能動的なエージェントとして位置づけることが可能となる（Latour 2005; 大橋・竹林 2013; 2015）。また、価値は、これら異質な要素（heterogeneous entities）が結びつき、互いの役割を調整・定義し合う「翻訳」のプロセスを経て出現する。大橋・竹林（2015）が指摘するように、観光学へのANTの適用は、観光を単なる移動や消費としてではなく、人間と非人間が絶えず関係性を編み直

すプロセスとして再定義する試みである。ANT は事象を背後にある構造で説明するのではなく、アクタン同士がどのように結びつき、いかにして特定の「実態」や「価値」が一時的に安定化するかを示すことが出来る。つまり、そこにはナラティブが発生するのである。

1.2. 登山観光におけるアクタン

日本における山岳は、単なる自然地形ではなく、古来「境界の山」や「信仰の対象」としての性質を帯びていた。生駒山は、役小角の伝説や「前鬼・後鬼」といった民話と結びつくことで、生駒山が冥界への入り口という物語を生成し、それが文楽という別のメディアへと翻訳されて流布した。同様に、高尾山の「大権現」や筑波山の「女体山・男体山」という社寺・神体も、仲介者 (Mediator) として機能している。ここで重要なのは、江戸期の「講」という人間集団を動員したのが、純粋な信仰心のみならず、娯楽性を内包した「お祭り」や「参詣」というハレの場のネットワークであった点である (堀口・村山・影浦・高浜 2022)。例えば、鎌倉の鶴岡八幡宮における初詣というイベントは、1 月に観光客を激増させる強力なアクタンとなり、場の価値を劇的に向上させる。また、小田原の「小田原城菊花展」のように、江戸期から続く園芸文化を継承する祭事は、季節の風物詩として社会に定着し、観光客を特定の空間へ誘引する役割を担っている (堀口・村山・影浦・高浜 2022)。

概念や言葉も状況を変化させる媒介者たり得るアクタンである。ジョージ・マロリーの「Because it's there.」(The New York Times 1923) という発言は、エベレストを「征服すべき対象」へと翻訳し、近代アルピニズムを象徴する表現にとどまらず、仲介者となった。ドイツのブロッケン山においては、標高 1141 メートルという物理的属性以上に、ゲーテの『ファウスト』が山頂を「魔女の集会場所」と描いたことが決定的な意味を持つ。この物語は「ヴァルプルギスの夜」という祭りと結びつき、ブロッケン山のナラティブを産み出したのである。また、ルソーの思想やドイツの「生改革運動 (Lebensreform)」(南 2017) は、山岳を「近代社会への批判」や「人間の自由の回復」の場として再定義した (堀口・村山・影浦 2023)。これが日本において「ワンダーフォーゲル」というアクタンに翻訳された際、当初の思想的深度は失われたものの、大学の「サークル」や「部活動」という人間集団を媒介することで、集団的アイデンティティを形成 (城島 2015) する新たな物語へと変容した。

技術から生み出された人の身体的限界を克服する機能を持つ鉄道やケーブルカーも、ANT の視角に立つと、単なる輸送手段ではなく、空間的制約を弱め、特定のナラティブを大衆へと接続する「翻訳機」と見做すこともできる。高尾山や筑波山におけるケーブルカーは、険峻な自然を「日帰り可能な観光地」へと書き換え、軽装の観光客という新たなアクタンをネットワークに組み込んだ。この技術的介入により、居住地から遠く離れた名所旧跡は、肉体的苦痛を伴わずに消費可能な「快適な物語」の一部となった。例えば、小田原においては、小田原城や石垣山一夜城といった歴史的遺構 (名所旧跡) が、現代の商業資本と結びつくことで価値を逡増させている (堀口・村山・影浦 2023)。石垣山一夜城の「野面積みの石垣」という物理的アクタンは、隣接する「一夜城 Yoroizuka Farm」とシナジーし、散策による身

体的空腹感が「限定された食材の味」という価値を最大化させる装置として機能している（堀口・村山・影浦；2023）。また、小田原の「かまぼこ通り」や「街かど博物館」に指定された老舗店舗は、単なる物販の場ではなく、蒲鉾の製造工程や歴史を体験させることで、観光客を「文化の追体験」というナラティブに引き込む（堀口・村山・影浦 2023）。また、早川港の漁港食堂で提供される新鮮な魚介類は、温泉地である箱根への移動という一体的空間の中に組み込まれ、小田原から箱根へと続く連続的な価値連鎖を形成する（堀口・村山・影浦 2023）。

登山観光とは、自然環境、神話、祭礼、名所旧跡、鉄道、そしてグルメといった異質なアクタンが「翻訳」のプロセスを経て重層的に結びついたネットワークである。観光客は単に物理的な山を移動するのではなく、これらのアクタンが編み出す多層的なナラティブを消費し、その関係性の一部となることで、非日常的な価値を享受しているのである。

2. 登山の大衆化

山岳が大衆向けの観光地として成立するためには、物理的な移動手段の整備のみならず、その空間を訪れるべき場所として人々を意識させる「物語（ナラティブ）」の構築が不可欠である。日本における登山の大衆化プロセスを概観すると、そこには時代ごとに異なるアクタンが介入し、山岳の意味を多層的に書き換えてきた歴史が見出される。

日本における大衆消費としての登山の形態は、山岳信仰に基づく「講」という人間集団を基盤としていた（堀口・村山・影浦 2023）。江戸期において、富士講や大山講に代表される参詣登山は、表向きは宗教的儀礼を目的としながらも、その実態は「信仰と行楽を兼ねた」娯楽的なナラティブに支えられていた。宝暦年間（1751-1763 年）には、大山だけで年間約 20 万人が参詣したという記録があるが、これは純粋な信仰心という内発的動機に加え、旅の途上での交流やハレの場の享受といった「方便としての観光」が、講というコミュニティを通じて社会的に安定化していたことを示している（堀口・村山・影浦 2023）。この時期、山岳は現世利益をもたらす神仏の宿る場として翻訳され、御師（おし）や茶屋といった支援インフラとともに、観光空間を形成していた。

明治維新以降、この伝統的なナラティブは、西洋から流入した近代アルピニズムや「ワンダーフォーゲル」という新たな思想的アクタンによって再編を迫られることとなった。繰り返しになるが、ドイツの生改革運動に端を発するワンダーフォーゲルは、本来ルソー主義的な近代文明批判を背景とし、自然の中での身体的実践を通じた自己回復を企図するものであった（堀口・村山・影浦 2023）。しかし、日本におけるこの思想の受容は、戦後の教育制度という制度的アクタンの影響を受け、特有の変容を遂げる。大学における体育科目の正課化に伴い、大人数の学生を動員する手段としてワンダーフォーゲルが活用された結果、それは峻険な山岳を征服するスポーツ登山とは異なる、集団内の同一性を確認するための「コミュニティ活動としての徒歩旅行」へと再定義されたのである。ここには、江戸期の「講」が有していた集団アイデンティティの形成というナラティブが、形を変えて現代的なレクリエーションへと接続された姿が見て取れると考えることが出来る。

このように、日本の登山観光は、古来の「信仰」という物語と、近代の「思想的実践」という物語が、異質なアクター同士の翻訳 (translation) プロセスを経て、絶えず新たなネットワークを構築することで発展してきた。現代の登山者が高尾山や筑波山、あるいは箱根といった空間に惹きつけられるのは、単に自然景観を消費するためではない。それらは、歴史的な伝承や近代的なレジャー思想、そして後述する交通テクノロジーという異質なアクターが重層的に結びつき、一時的に安定化した「多層的な物語」の一部となる行為なのである。

3. ナラティブと結びついた登山観光の事例検討

本節では、具体的な地域空間においてナラティブがいかにより再編されたのかを検討する。まず、対象地域の登山観光における史的展開を概観し、近世以前に生成された物語の構造を読み解く。その上で、近代以降の交通技術の進歩が単なる移動の効率化に留まらず、物語を広範な地域へと拡散し、不特定多数の人々へ定着させるための『メディア (翻訳機)』としていかなる役割を果たしたのかを考察したい。具体的な事例としては、日本の生駒山とドイツのブロッケン山、および箱根山の動態を取り上げる。

3.1. 生駒山

生駒山は、奈良県と大阪府の境界に位置する標高 642m の山岳であり、古来より両地域を分かち「境界の山」として独自の精神的空間を形成してきた。近代以降は、ケーブルカーをはじめとする交通インフラの整備がこの物語の空間的な拡散を後押しし、多くの観光客を動員する拠点として発展した。多くの観光客が押し寄せ、2018 年のデータによれば、山頂には 23 万 2 千人、山麓の寶山寺には 95 万 2 千人もの参拝・観光客が訪れており (生駒市地域活力創生部経済振興課¹)、信仰とレクリエーションが融合した独自の観光圏を維持している。

3.1.1. 生駒山の観光小史

生駒山における観光の歴史的展開は、古来の宗教的聖地から近代的な大衆行楽地への変容、および現在に至る両者の共存という構造を有している。そこで、近世から現代に至る生駒山の観光小史を概観し、信仰 (聖)、都市開発 (俗)、行楽 (遊) の近接性がもたらした独自の空間形成過程について考察していく。生駒山観光の源流は、近世の信仰を基盤とする大衆参詣に見出される。江戸中期には宝山寺への参詣が盛んに行われたが、これらの行動は純粋な信仰的動機にとどまらず、物見遊山的な遊興の要素を内包していた (渡邊 2022)。この時期、生駒山は役小角や湛海律師の伝承を背景とした「霊験あらたかな祈祷の場」として、大阪や京都の商人層から絶大な支持を集める聖地空間を構築していた。近代における生駒山の観光地化は、箱根における登山鉄道の敷設と同様、鉄道網の整備という新技術の活用によって推

¹ 生駒市「生駒市商工観光ビジョン データで知ろう生駒市の経済と産業」
<https://www.city.ikoma.lg.jp/0000034868.html> (2026 年 2 月 10 日)

し進められた（渡邊 2022）。1890 年代の鉄道開通を経て、決定的な転機となったのは 1914 年の大阪電気軌道（大軌）による生駒トンネルの貫通である。難工事による巨額の建設費を回収すべく、大軌は利益性の高い行楽輸送を重視した。その結果、最大の集客拠点であった宝山寺の門前町には料理旅館や芸妓置屋が急速に集積し（渡邊 2022）、聖域の入り口は大阪市民の「俗」なる歓楽の場へと翻訳されることとなった。1918 年には、日本初の営業用ケーブルカーである生駒鋼索鉄道（鳥居前―宝山寺間）が開通した（石上 2018；渡邊 2022）。この鋼索鉄道という新たな非人間的アクターの登場は、参拝者の身体的負担を劇的に軽減し、信仰空間を日常的なレジャー圏へと接続させ、新たな大衆観光のネットワークへと再編した。さらに 1929 年にはケーブルカーが山上まで延伸され、大軌によって「生駒山上遊園地」が開園する。この山上開発は、門前町の歓楽的性格とは一線を画す、健全なファミリー向けの行楽地を創出する試みであった（渡邊 2022）。昭和期から戦後にかけて、生駒山はスカイラインの開通や夜景観光の拠点化を経て、さらなる多層化を遂げる。1980 年代の絶叫マシンを中心とした隆盛期を過ぎ、現在は入園無料化を伴うファミリー向け施設へと再編されているが、特筆すべきは、これら近代的な遊楽施設が、宝山寺という古来の信仰拠点と物理的・象徴的に連続したネットワークを保ち続けている点である。その結果、現在の生駒山は、山麓の宝山寺に年間 95 万 2 千人、山頂に 23 万 2 千人の観光客を動員する巨大な観光圏を形成している（渡邊 2022）。これは、箱根が「天下の険」というナラティブを登山鉄道によって「ゴールデンコース」へと再編したのと同様に、生駒山が「境界の霊山」という物語を、日本最古の鋼索鉄道を媒介として、聖・俗・遊が絶妙な均衡で混ざり合う独自の空間へと変容させてきた歴史の結実といえる。

3.1.2. 近世以前の生駒におけるナラティブ

近世における生駒の物語を知ることのできる史料としては、『大和名所図会』を挙げることが出来よう。これは寛政 3 年（1791 年）に板行された名所図会であり、大和国の名所・旧跡や寺社の由緒、風俗を豊富な挿絵とともに詳述した資料である。全六巻のうち、巻之三において生駒山が取り上げられている。同書において、生駒山の中心的存在として紹介されるのは「宝山寺」である。そこでは次のように記されている（引用史料のうち（）は割書。）。

宝山寺（生駒山にあり）般若窟ハ役小角修行の霊窟也。中興宝山和尚本堂の中尊ハ不動明王、左右ハ矜羯羅・制吒迦地藏観音也（宝山の作）。歡喜天祠（本堂の後にあり）。常念観音堂（本堂の坤の隅にあり）。雲上閣（本尊虚空蔵）。弥勒仏（乾の隅岩腹にあり）。弁才天社（旧より此山の鎮守也）。役行者堂（行者の洞にあり）。十三級石塔婆（岩山頂の上にあり。内に仏舎利及ひ三十仏名の銘あり）。

生駒山は役小角の修行地としての「般若窟」を中心とした、峻厳な修行の場、および湛海律師による中興を経た「霊験あらたかな祈祷の場」としての性格が際立っている。

『生駒山宝山寺縁起（般若窟記）』および『大和名所図会』に基づき、生駒山に関連する由緒に関わる部分を以下に示す（旧字は新字に改めた。（）は割書。句読点は筆者。）。

（前略）平群郡菜畑の庄の領分に般若の窟といふ処あり。抑かの般若の窟と申ハ、上古に役小角居住の地と申伝るはかりにて、其後何れ誰人の住たまへるといふ伝へもなし。唯鬼魅盛んにして能く人を怖す。山下の里人たりといふとも、昼七ツ下りて此山に入ことあたはず。又林木伐採するものあれハ、或ハ火難を得又ハ悪病を受く。（中略）此麓に着く。頃ハ延宝六丙午歳十月十日なり。其日途中にて何となく法乃字を改て宝山として此山に望む。当村の里政朴木氏出向ひ彼を案内として攀のほり先境地を見るに、山の体たらく奇石峨々として一団となつて高く頂にそひへ、漢をおかしてぬけ須弥楞伽山にも類すへきこときの勝地なり。半腹より下は額石算を乱すかことし。山谷にみちて足の踏ミともなし。（『生駒山宝山寺縁起（般若窟記）』）

それ宝山和尚ハ山田氏勢州安濃郡一色村の人也。延宝六年十月十日、始て当山般若窟に入、一笠一衣体を隨身し樹下に安座す。ある夕暮に黒色の大夜叉来現し宝山を捉て曰、汝何ゆへ我山に来住するや、宝山の眼忽に瞑て気絶せんとす時に不動を念して名号を唱ふ。力拾倍してかくいふハ何者そと問ふ。夜叉神答ずして逃去る。其後岩船明神に詣して盤石能かの夜叉の肌膚に作たり。是に依て明神の来試を知れり。一日麓の里人来ツて当山の鎮守弁財天乃像近世山下の俗家に安置す。宝山則これを拝授し改て祠を建。延宝八年四月朔日より五日断食し八万枚の護摩を修し、本尊不動明王を彫刻す。又自弥勒の像を鑄て岩窟に安す。其外雲上閣にハ虚空蔵を安置し、観音院にハ観音を居たり。星霜二十年に至らすして一峯大伽藍となる。初メ大聖無動寺と号し、後改て宝山寺といふ。中古無比の行者也。正徳六年正月十六日入寂。（『大和名所図会』）

鬼取山鶴林寺（平群郡生駒山の麓有里村にあり）本尊ハ薬師如来にして此山の旧名は般若岩屋といふ。又鬼取とは役行者儀学儀賢の二鬼をとらへられし所といへり。されば役行者かつらき山にをこなはれしとき鬼神をめしつかひ給ふ。命をそむく者にハ呪縛ありし也。故に随ハすと云事なし。（『大和名所図会』）

この記述で、役小角が生駒山において人々を害していた二匹の鬼を般若窟において調伏して弟子としたという伝説が、この地が聖域へと転換される重要な契機として機能している。この伝説は、かつて恐怖の対象であった「境界」としての生駒山が、役小角の法力によって守護された空間へと変容したことを示しており、後代には文芸などのメディアを通じて大衆的な物語として定着していくこととなった。ただし注意が必要なのは、生駒山において決定的な役割を果たしているのは、中興の祖である宝山和尚こと湛海律師である。湛海による歓喜天（聖天）への信仰は、江戸時代中期以降、現世利益を求める大衆の欲求と強く結びつい

た。特に興味深いのは、自然の地形に宗教的な意味を読み込む構造である。箱根において「目代木」や「九頭龍」が空間の境界や守護を象徴したように、生駒山では般若窟という「絶壁の霊窟」が、役小角の修行という記憶を通じて、現世と聖域を分かち象徴的な結節点として機能している。生駒山の特筆すべき点は、その霊験が「現世の欲望」を包摂する形で展開されたことにある。湛海により鎮守として仰がれた歓喜天は、商売繁盛や現世の多幸を叶える神として、都市部である大阪や京都の商人層から絶大な支持を集めた。これは、生駒山が「経済的・精神的充足」という救済を供する場として、都市近郊における特有の聖地空間を構築したことを意味している。

以上、『大和名所図会』および『生駒山宝山寺縁起』を素材として生駒山の世界空間を概観した。箱根と生駒、いずれの山岳においても、自然の物理的属性（険峻な地形や温泉）に対して、宗教的な由来や奇跡の構造が付与されることで、人々を惹きつける象徴的な空間が再編されていることが確認できる。両者の比較を通じて、山岳という空間が技術や交通の整備以前に、いかなる精神的基盤によって人々を動員し得たのかを明らかにすることは、観光空間の変容を考察する上で不可欠な作業といえよう。

3.2. 箱根山

箱根山は、神奈川県と静岡県との境界に位置する巨大なカルデラを持つ火山群であり、古来より東海道の難所「天下の険」として、東西を分かち「境界の山」としての象徴性を帯びてきた。近世以前、箱根権現への信仰や温泉療養（湯治）を軸とした精神的な空間として機能していた箱根は、近代以降、登山鉄道やロープウェイといった重層的な交通インフラの敷設により、「天下の険」というナラティブを大衆向けの快適な観光体験へと翻訳した結果、今日では世界的な観光拠点として発展を遂げている。近年では、外国からも多くの観光客が押し寄せ、2019年のデータによれば、箱根町全体での観光客入込数は年間約1,902万人に達し（神奈川県国際文化観光局²）、伝統的な湯治文化と近代的なレジャーが高度に融合した巨大な観光圏を確立している。

3.2.1. 箱根山の観光小史

箱根の観光史は、古来の山岳信仰の聖地から、近世の宿場・湯治場を経て、近代以降の国際観光保養地へと変容を遂げてきた。地理的には、箱根は古代からの交通の要衝であるが、箱根山を中心とする山々により西国と東国を隔てる障壁ともなっていた（西・森田 1993）。古代の箱根山は山岳信仰の対象であり、757年には箱根三所権現が祭祀されたと伝承されている（野瀬 2008）。鎌倉期には「二所詣」として伊豆山神社（伊豆山権現）と箱根神社（箱根権現）を連続して参詣する幕府行事が成立し（箱根権現参詣 2011）、繁栄を迎え、江戸時

² 神奈川県「令和元年入込観光客調査」

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/b6m/cnt/f80022/p1202219.html> （2026年2月10日）

代初頭には、東海道の整備とともに箱根越えの道が開削され、軍事・交通の要衝として元和 5 年（1919 年）に箱根関所が設置された（西・森田 1993）。江戸後期には、講集団による旅行の一般化に伴い、東海道の正規宿場である小田原や箱根宿を逸れ、湯本や芦之湯の温泉地に宿泊する「一夜湯治」が普及した（野瀬 2008）。この現象は、医療目的から娯楽目的へと移行する現代的温泉観光の萌芽と見做せよう。明治維新後、開国に伴い箱根は新たな転換期を迎えた。初期の不平等条約下において、外国人の行動範囲は開港場である横浜の居留地から 10 里以内に制限されていたが、箱根は「湯治」を名目とした訪問が例外的に許可され、結果として外国人避暑保養地として脚光を浴びることとなった（横浜開港資料館編 1998；野瀬 2008）。この需要に着目した福沢諭吉は、1873 年に箱根山の車道開削を提言した。その後、福沢の門下である山口仙之助らが宮ノ下の温泉旅館を買い取り、1878 年に外国人専用ホテル「富士屋ホテル」を開業するなど、民間主導による受入体制の近代化が進展した（野瀬 2008）。山口の行動は、箱根を伝統的な「湯治場」から、西洋の生活様式とホスピタリティを備えた「近代リゾート」へと翻訳しようとする、資本による実践の第一歩であった。交通インフラにおいても、1887 年の湯本から塔之沢・宮之下に至る車道の完成（野瀬 2008）、1888 年の小田原馬車鉄道の開通など、近代的な交通網の形成が民間資本によって牽引された（野瀬 2008）。この交通インフラの進化は、単なる移動手段の近代化にとどまるものではない。富士屋ホテルをはじめとする点的な資本の拠点を、東京や横浜という巨大な都市ネットワークと物理的に接続し、外国人観光客や新興の国内富裕層を箱根へと安定的に動員するための強固な回路として機能したのである。

明治末期から大正期にかけては、交通網の延長に伴い、さらなる大規模な面的観光開発が展開された。注目すべきは、強羅地区の事例である。同地区では、帝国生命の福原有信を筆頭に、福沢一族や交詢社系統などの有力資本家グループが共同で広大な山林原野を取得した（小川 2011）。彼らは一種の「不動産ファンド」として機能し、小田原電気鉄道に対する登山鉄道敷設や強羅園建設に向けた継続的な資金支援を行った（小川 2011）。当時の変化を小川（2011）は、鉄道省編纂『温泉案内』を引用し、「以前は焼石の原に灌木の生へた殺風景な荒野であったが、小田原電鉄で遊園を開き、登山電車を此處まで敷いたので形勢一変した。」（小川 2011 p. 122）と、登山鉄道の敷設がターニングポイントであったこと示した。つまり、温泉インフラ、西洋式庭園、そしてそれらを都市部と直結させる登山鉄道という複数の異質なアクタンが強固に結びつくことで、強羅は新興の財閥や文化人を惹きつける高級分譲別荘地として急速に発展したのである。それを後押しする取り組みとして、強羅では 1921 年より大文字焼が開始されるなど、新たな文化的観光資源の創出も図られた（箱根強羅観光協会 2022）。一方で、芦ノ湖畔においては近代以降の民間開発に伴う空間的課題が顕在化していた。民間企業による観光開発と土地の占有が進行した結果、公共空間としての自然湖岸が喪失しつつあったのである（古谷ほか 1999）。この課題に対し、神奈川県は 1950 年代より人工的な湖岸の埋立や民有地の買収・交換事業を積極的に推進し、元箱根園地や箱根園地を整備した（古谷ほか 1999）。これにより、国立公園としての景観保護と、一般大衆が水辺に親

しむための公共用地の確保が両立された（古谷ほか 1999）。小田原馬車鉄道から小田原電気鉄道、そして後の箱根登山鉄道へと至る交通資本の連続的な投下と技術革新は、箱根の険しい地形を「苦勞して越えるべき障害」から「快適な車室から消費すべき風景」へと意味を反転させた。福沢の提言に始まり、山口仙之助のホテル経営、そして鉄道インフラの整備へと連なるアクターたちの結びつきは、箱根を旧来の靈驗や湯治のナラティブから切り離し、近代リゾート空間として不可逆的に再定義する決定的な翻訳プロセスであったと言える。

現代に至り、箱根の観光開発は単なる物理的インフラ整備から、地域全体を一体的な観光資源としてマネジメントするフェーズへと移行している。それは、アクターがネットワーク化されることによって「観光エコシステム」が構築されたとも言え、それを機能させるために、2018年には箱根DMOが設立され、行政と民間事業者が連携してマーケティングや質の高い観光地づくりを推進する協働体制が整備された（箱根町 2018）。

3.2.2. 近世以前の箱根におけるナラティブ

『東海道名所図会』は、寛政9年（1797年）に板行された資料であり、京都の三条大橋から江戸の日本橋に至る宿場や名所、伝説を精緻な挿絵とともに記録している。全六巻のうち巻之五に収録された箱根の「目録」には、割書を除いて18項目が並ぶが、そのうち半数の9項目が温泉に関する記述で占められている。この構成は、当時の箱根が湯治場としての強力な誘引力を備えていたことを物語っている。「○箱根」として「目録」にまとめられ紹介されるのは、以下のとおりである（引用史料のうち（）は割書。改行は改めた。下線は筆者）。

○箱根 箱根湖水（名産） 箱根権現社（本社、末社、大師堂、行者堂、獅子巖、御供所、薬師堂、親鸞聖人堂、曾我兄弟禿倉、名所四十九箇所） 箱根温泉（生死池、頼朝状書石、齋之池、元西河原、多田満仲塔、十二光佛石像、曾我兄弟墳虎墳、庚申墳） 蘆之湯 小地獄 気賀湯 底倉湯 宮下湯 堂島湯 塔澤湯（勝麗山、玉緒橋） 湯本湯 温泉記 湯本名品挽物店図 早雲寺（佛殿、宗祇墳、北条五代墳） 早湊 浄泰寺 豊太閤陣所 石橋山

同書の見出し文によれば、箱根駅は霧深く曇天が多い峻険な嶺に位置すると記されており、230年前においても物理的な自然環境そのものが、この地の特殊性を形成する重要な要素であったことが伺える。しかし、山岳が観光の対象として立ち現れるためには、自然環境という物理的属性以上に、神仏などの超越的な存在が付与する意味の体系が不可欠である。江戸期までの箱根神社は「関東総鎮守箱根大権現」として知られ、その祭祀を金剛王院東福寺が司っていた。同書における金剛王院東福寺の由緒には、次のような記述が見られる（旧字は新字に改めた。句読点は筆者）。

それ当山の初ハ聖占仙人幽居の地にして、神威を崇め寿齡を保しとかや。孝安帝の御宇に

湖水の中に目代木を建て相豆駿三国の堺とし（中略）厥后役小角も登山し、行基大士も昇臨して東福寺と号し（中略）天平勝宝年中にハ、満卷上人鹿嶋明神の神勅を蒙り錫を止め当山に練行する事三ヶ年、此時箱根三社権現を崇て上人を中祖とす。（中略）又湖水の西の淵に九頭の大龍有て、時々風波を起し人民を悩す。上人かの深淵に臨んで神呪し給へば毒龍水上に現ず。即鉄鎖の呪縛し給へば、大樹の下に繋れ、永当山の守護神とならん事を侘る。

この由緒において注目すべきは、役小角や行基、弘法大師といった宗教的権威を重層的に配置することで、聖地としての正当性を補強している点である。特に、満卷上人による「九頭の毒龍」の調伏は、荒ぶる自然を鎮め、守護神へと転換させる象徴的な出来事として描かれている。これは、生駒山において役小角が前鬼・後鬼を調伏し、境界の山を安寧の地へと変容させた構造と極めて近似している。さらに、箱根におけるこうした靈験の構造は、温泉という資源にも投影されている。「箱根山温泉記」では、温泉の起源を白山妙理権現による開湯とし、「諸病悉除」や「息災延命」のしるしを神力によって裏付けている。生駒山が湛海律師による歓喜天信仰を通じて、商売繁盛という「現世の欲望」を肯定する救済の場を構築したのと同様、箱根もまた、温泉という自然資源に神仏の靈験を結合させることで、身体的救済を求める人々を動員する場を形成していたのである。

以上、『東海道名所図会』を素材として箱根権現社と箱根温泉について概観した。そこでは両者の権威化に靈験譚が付随していることが確認できたが、その内容は他地域の靈験譚と共通する構造を有するものである。この点をさらに検討するためには、それらの比較検討により、箱根権現社や箱根温泉の独自性を明らかにする必要がある。これは今後の課題としたい。

4. 鉄道敷設とナラティブの変化

近世において、生駒山も箱根山もすでに大衆を惹きつける固有の物語を持つ観光地としての地位を確立していたといつてよい。それは、それぞれの地域が古来より内包していた神秘性や宗教性が、時代ごとの人々の欲求に合わせて再翻訳され、現世利益や健康の回復を希求する人々が集まる場となっていたからである。生駒山においては、役小角が前鬼・後鬼を調伏したとされる「般若窟」の記憶が、湛海律師による歓喜天信仰へと接続されることで、大坂の商人層を中心に商売繁盛という現世の欲望を叶える祈祷の場へと変容していた。一方、箱根山においては、満卷上人による九頭龍調伏の伝説や箱根大権現への信仰が、白山妙理権現の靈験としての「諸病悉除」を謳う温泉（湯治）と結びつき、身体的救済を求める人々を引き寄せていた。しかし、これらの両地域は、生駒の暗峠や箱根の「天下の険」と称されるような急峻な峠道を徒歩や駕籠で越える必要があり、物理的な抵抗（摩擦）が極めて大きく、決してすべての人々が容易に到達し、消費できる空間ではなかった。

図 1：生駒山ケーブルカー



筆者撮影（村山）

図 2：箱根登山鉄道



筆者撮影（影浦）

近代に入ると、こうした強固な空間的・身体的バリアーを排除する画期的な技術的アクタンが生じる。生駒山では、1914 年の大阪電気軌道による生駒トンネルの開通に続き、1918 年には日本初の営業用ケーブルカーである生駒鋼索鉄道（鳥居前～宝山寺間）が開業した。これにより、かつて険しい山道を登らねばならなかった参拝の労力は劇的に軽減された。さらに箱根山においても、スイスの山岳鉄道の技術を導入した日本初の本格的登山鉄道である箱根登山鉄道（箱根湯本～強羅間）が 1919 年に開通し、急勾配をスイッチバック方式で登り切るといった技術的克服が成し遂げられた。これらの交通インフラの敷設は、単なる移動手段の近代化にとどまらず、両山岳を大都市圏の周縁に位置する「日帰り可能な大衆レジャー空間」へと完全に組み込む機能（メディアとしての機能）を果たした。生駒鋼索鉄道の開通により、生駒山は大阪市民にとって手軽な行楽地となり、箱根登山鉄道は、東京市（当時）民にとって週末の身近なリゾート地として感じる存在となった。もちろん、両地域は神秘性や宗教性を持つ土地であるが、近世から近代への移行は、それらから精神や社会を切り離す過程であったともいえるので、過大な摩擦をもたらさなかったのであろう。さらに、近年の観光市場において「安・近・短」は消費行動を決定づける不可欠な要素となっているが、20 世紀初頭における鉄道網の整備は、まさにこの時間的・空間的な制約を物理的に排除し、大衆の移動欲求を爆発させる原動力となった。この圧倒的な空間的圧縮により、山岳に付与されていたナラティブは不可逆的に上書きされ続けていく。生駒山においては、かつて冥界への入り口であり、鬼が棲むと恐れられた魔界の境界線が、1929 年のケーブルカー山上延伸と大軌による「生駒山上遊園地」の開園によって劇的に反転した。大型の飛行塔などの近代的な遊具を備えた山上空間は、恐怖や神秘の対象から、家族連れや子どもたちが歓声を上げる健全な「遊樂の空間」へと完全に翻訳されたのである。箱根も同様に、ナラティブの質的な転換を経験した。箱根登山鉄道の終点となった強羅地域は、かつては荒涼とした岩原であったが、鉄道

の開通に伴う温泉の引き込みとフランス式整型庭園（強羅公園）の整備により、近代的な高級別荘地へと変貌を遂げた。この基盤整備は、後の時代における文化的資本の集積を呼び込むこととなる。すなわち、純粹に湯治による「健康の回復」を主目的としていた土地が、彫刻の森美術館やポーラ美術館をはじめとする多数の芸術施設を擁する「美と教養を消費する土地」へと上書きされたのである。このように、鉄道という技術は、生駒山を「祈りと恐怖の山」から「娯楽の山」へ、箱根山を「治癒の山」から「美と鑑賞の山」へと再定義する強力な装置として機能した。

最後に

アクターネットワーク理論（ANT）の視座を援用し、登山観光空間の歴史的変容を「人間と非人間的要素（技術、地形、伝承）の動態的な翻訳（translation）」という観点から考察してきた。近代化に伴う観光の大衆化は、単なる余暇時間の増大や所得水準の向上といった人間側の社会経済的要因のみに還元できるものではない。山岳という物理的障壁、そこに仮託された神話や信仰といったナラティブ、そして空間を圧縮する交通テクノロジーが、いかにして互いの利害を調整し、「翻訳」のプロセスを経て安定的なネットワークを構築したのかを解明することが本研究の主眼であった。生駒山と箱根山の事例分析を通じて明らかになったのは、近代の技術的介入以前から、両山岳はすでに固有のナラティブを媒介とした高度なネットワークを形成していたという事実である。江戸期において、生駒山は役小角の伝承から連なる「境界の魔界」から、湛海律師による歓喜天信仰を通じて「現世利益を供する聖地」へと翻訳されていた。一方、箱根山は「天下の険」という峻険な地形的抵抗を保持しつつも、九頭龍伝説や箱根権現の靈験、そして「諸病悉除」を掲げる温泉（湯治）を媒介として、人々の身体的救済を担う空間として機能していた。大山講や富士講に代表されるように、近世の参詣登山は純粹な信仰的動機と娯楽的要素が混交した「方便としての観光」を成立させており、この歴史的基盤がのちの大衆観光を準備する強固な土壌となっていたのである。しかし、近代に入り登場した「登山鉄道」や「鋼索鉄道（ケーブルカー）」という新たな非人間アクターは、これらの空間に不可逆的な変容をもたらした。本稿が論証したように、鉄道は単に物理的距離を短縮する中立的な手段ではない。それは、急勾配という自然の抵抗を無効化し、旧来の宗教的権威や地形的文脈を新たな大衆消費の文脈へと強制的に書き換える「強力なメディア（翻訳機）」として機能したのである。1918 年に開業した生駒鋼索鉄道は、参拝という身体的苦痛を伴うプロセスを劇的に軽減し、山麓の門前町における歓楽（俗）と、山頂に新設された遊園地における健全なレクリエーション（遊）を、宝山寺の信仰（聖）と一直線に結合させた。この「聖・俗・遊」の近接と共存こそが、生駒山におけるアクターの翻訳の特質である。また、1919 年に開通した箱根登山鉄道は、強羅の岩原を近代的な別荘・リゾート空間へと書き換え、点在していた湯治場を広域的な観光ネットワークへと編み直した。かつて治癒や修行を目的としていた空間は、美術鑑賞やレジャーという文化的資本を消費する空間へと再定義されたのである。本稿で提起した「観光空間における翻訳プロセス」とは、

異質なアクター（資本、技術、神話、地形）が交渉・結びつくことで、従来の空間的価値が変容し、新たな意味のネットワークが安定化するメカニズムを指す。生駒と箱根における近代鉄道の敷設は、まさにこの動態的な空間再編を示す歴史的画期であった。もちろん、現代における両地域の莫大な集客力は、戦後のモータリゼーションや近年のインバウンド需要といった後発の強力なアクターによる影響も大きく、そのすべての因果を近代の鉄道敷設のみに帰結させることは実証的に慎重であるべきだ。しかし、近代交通インフラがもたらした「ナラティブの物質的固定化」と「大衆動員のネットワーク構築」というパラダイムシフトが、現代に続く観光空間の骨格を決定づけたことは疑いない事実である。観光振興が声高に叫ばれる現代において、単なるハードウェアの整備や表層的なストーリーテリングの付与だけでは、持続可能な集客力は生み出せない。地域に埋め込まれた歴史的ナラティブと、新たな技術や資本がいかにして「翻訳」を成し遂げたのかを探る必要があり、それは今後の研究課題としたい。

参考文献

- Food and Agriculture Organization of the United Nations and the World Tourism Organization (2023). Understanding and Quantifying Mountain Tourism. FAO, Rome, Italy, and UNWTO, Madrid, Spain. Retrieved May 5, 2025, from <https://www.e-unwto.org/doi/epdf/10.18111/9789284424023> (2025年5月1日閲覧)
- Latour, B. (2005) Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory, Oxford, England: Oxford University Press. (B・ラトゥール (2019)『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高(訳), 法政大学出版局.)
- The New York Times (1923). Climbing Mount Everest Is Work for Supermen, The New York Times, Sunday, March 18 1923. Retrieved May 5, 2025, from http://wattandedison.com/Mallory_NY_Times.pdf (2025年5月1日閲覧)
- 秋里湘夕 (1791)『大和名所図会』森本太助等.
<https://www.digital.archives.go.jp/file/1231694.html> (2026年2月10日閲覧)
- 秋里籬島 (1797)『東海道名所図会』小林新兵衛等.
<https://www.digital.archives.go.jp/file/1241787.html> (2026年2月10日閲覧)
- 小川功 (2009)「生駒山麓の遊園・観光開発計画の蹉跌 -日下温泉土地を中心として-」『生駒経済論叢』7 (1), pp. 77-93.
- 古谷勝則、油井正昭、赤坂信、岡本里絵 (1999)「富士箱根伊豆国立公園における芦ノ湖埋立園地の成立と変遷」『千葉大学園芸学部学術報告』53, pp. 59-74.
- 大橋昭一、竹林浩志 (2013)「現代経営戦略論のあり方についての一考察 : ポーター経営戦略理論に関連して」『経済理論』374, pp. 21-36.
- 大橋昭一、竹林浩志 (2015)「観光事業論におけるアクターネットワーク理論の意義 : ポス

- ト・アクターネットワーク理論をふまえて」『観光学』12, pp.15-25.
- 小川功 (2011)「箱根の遊園地・観光鉄道創設を誘発した観光特化型“不動産ファンド”―福原有信・帝国生命による小田原電気鉄道支援策を中心に」『彦根論叢』387, pp. 122-135.
- 箱根強羅観光協会 (2022)『箱根強羅温泉 大文字焼百年』箱根強羅観光協会.
<https://goura-kanko.jp/teresa/wp-content/uploads/2024/05/daimonji100.pdf> (2026年2月10日閲覧)
- 城島紀夫 (2015)『ワンダーフォーゲル活動のあゆみ―学生登山の主役たち』古今書院.
- 西淳二、森田真 (1993)「箱根路の変遷について―海路から陸路へ―」『土木史研究』13, pp. 527-534.
- 野瀬元子 (2008)「日光、箱根を対象とした観光地形成過程についての考察―観光資源、交通環境と初期段階の外国人利用の差異に着目して」『東洋大学大学院紀要』45, pp. 31-56.
- 箱根町 (2018)『第2次箱根町 HOT21 観光プラン基本計画』箱根町企画観光部観光課.
<https://www.town.hakone.kanagawa.jp/www/contents/1100000001649/simple/20180509-103323.pdf> (2026年2月10日閲覧)
- 関口静雄、岡本夏香、阿部美香 (2015)「一枚の世界 ―その小釈の試み(5)」『学苑』900, pp. 60-69.
- 原一樹 (2021)「アクターネットワーク理論を活用した観光研究に向けての準備的考察―概念的明瞭化と方法論の検討―」『Ignis』Vol. 1, pp. 81-100.
- 法山湛海述 (1813)『生駒山宝山寺縁起』寶山寺
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100175935/1?ln=ja> (2026年2月10日閲覧)
- 堀口朋亨、村山弘太郎、影浦亮平、高浜快斗 (2022)「集積資源と観光振興との相補性に関する考察 ―小田原における歴史・文化・産業の複合的活用を通じて―」『日本学研究』7巻、pp. 1-18.
- 堀口朋亨、村山弘太郎、影浦亮平 (2023)「江戸期から現代までの日本社会における登山の動機 ―高尾山・筑波山を事例とし、観光の観点から―」『日本学研究』8巻、pp. 1-16.
- 南直人 (2017)「一九／二〇世紀転換期ドイツにおける食改革運動と身体イメージ」『女性歴史文化研究所紀要』25, pp. 29-40, 京都橘女子大学女性歴史文化研究所.
- 横浜開港資料館編 (1998)『図説 横浜外国人居留地』河出書房新社.
- 渡邊太 (2022)「生駒山の宗教と観光」『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』84, pp. 1-11.

日本語の「ちょっと」とそれに対応する中国語表現 —日本語教育への応用に向けて—

The Japanese Word “Chotto” and Its Corresponding Chinese Expression: Toward Applications in Japanese Language Education

王 梓洋
辻 周吾

Summary

The purpose of this study is to analyze the functions of the Japanese expression “Chotto” as discussed by Peng(2004) and to examine its corresponding expressions in Chinese. On this basis, the study investigates whether there are similarities or differences in meaning between Japanese and Chinese. Finally, based on the findings, pedagogical suggestions related to the teaching of the Japanese expression “Chotto” are proposed. The results indicate that, in comparison with the meanings of “Chotto”, Chinese expressions such as “youdian”, “youxie”, “yidian”, “yihuier”, “yixia” verb reduplication forms, and verbal measure expressions also convey a relatively low degree and can soften the tone. However, “Chotto” can additionally express a relatively high degree of negative content, as in expressions such as “Chotto muzukashii”. In certain contexts, the Chinese expressions “youdian” and “youxie” can also convey this type of “implicit intensification”. From a contrastive analysis perspective, the use of “Chotto” to indicate a relatively high degree in negative contexts may constitute a learning difficulty for Chinese learners of Japanese. Therefore, when teaching expressions involving “Chotto”, it is recommended that this type of meaning be explained concurrently. This aspect should also be regarded as an important component in the instruction of “Chotto”.

1. 研究背景

日本語の「ちょっと」は、多義的な意味を持っており、「一時間ちょっとで着く」という小さい程度の意味を表すだけでなく、実際のコミュニケーションでは、「ちょっと出かけてきます」のように軽い行為の意味を表したり、「ちょっと様子をみてきて」のように軽い依頼の意味を表したりする。このように、日本語の「ちょっと」は、複数のコミュニケーション機能を持っている。

1.1. 日本語の「ちょっと」の分類に関する研究

また、これについての先行研究も複数確認できる。

中道（1991）は、「ちょっと」について、「命題内的意味を含んではいても、それが次第に希薄になるもの」として、「程度が高いことを表す用法」、「呼び掛け等として用いる用法」、「伝達態度をあいまいにする用法」、「間つなぎの用法」などの内容を説明している。

また、日本語の「ちょっと」の研究については、彭（2004）が挙げられる。彭氏の研究では、「ちょっと」に関する機能を、7つの下位分類から説明している。そして、「場面的添加」の意味として、本来の「少し」の意味と分けている。以下の内容がそれである。

①話者の適応力：話者自身の身についた能力、都合、可能性などを指す。

例) 私は中国語をちょっと話せますが、……

②話者の行為：話者自身の行為に限られる。

例) ちょっと「失礼して」お先に

③話者の判断：動作主は「話者自身」、「話者の下した判断内容（断定・推量）」が述語になることを指す。

例) ちょっと考えられない（暗示的強調。「とても」の意）

④話者の評価：「話者」がある物事に対して下した評価のことを指す。

例) あの人はちょっと

⑤勧誘：「話者」が相手にすすめ誘うことを指す。

例) ちょっと一杯、いかがですか

⑥依頼希求：「話者」が相手にお願いすることを指す。

例) すみませんが、ちょっと消しゴムを貸してくれませんか

⑦注意喚起：「話者」が相手に注意を喚起することを指す。

例) ちょっと気をつけて

同分類は、「相手に働きかけない」か「働きかける」かの視点から分類しているのが特徴的である。そして、日本語学習者に対して、どのような「ちょっと」の機能があるのかを示している。彭氏の研究は、日本語の「ちょっと」の研究を発展させたものであると言える。

また、彭氏は、「ちょっと」について、「少し」という本来の意味以外に「和らげ」や「暗示的な強め」といった機能を説明している。「和らげ」とは、「語気緩和」として、断定的な言い方を緩和し、表現を柔らかくするものである。「暗示的な強め」とは、「否定を暗示的に強める」ことを果たすものである。そして、「ちょっと～ない」の形で、程度が高い意味を暗示する。

それ以降の研究では、岡本・斎藤（2004）が、日本語の「ちょっと」のコミュニケーション機能を、「依頼や、希求、指示」、「行為の負担をやわらげる」、「否定的内容の前置き」、「断りを受けやすくする」、「呼びかけ」、「とがめ」、「間つなぎ」などの7つに分類している。

また、牧原（2005）が、談話における「ちょっと」の機能について、「通常の種類副詞としての用法」も含め、「聞き手に対する配慮を表す用法」、「会話管理に関わる用法」、「質問に対する明確な解答を避ける」などの4つに分類している。

また、辻（2022）では、日本語学習者の習得の視点から、「ちょっと」の意味・用法を分類した。そして、「話し手の判断を遠慮しながら伝える」、「話し手の行為を些細なものとして伝

える」、「話し手の願望をひかえめに伝える」、「話し手の断定しない事態に真意をほのめかして伝える」、「聞き手への依頼や命令をやわらげて伝える」、「聞き手への勧誘・提案を気軽なものとして伝える」、「聞き手の注意を引くために呼びかける」など、7つの意味・用法を確認している。

以上のように、先行研究における、日本語の「ちょっと」の機能をみてきたが、各研究で分類の仕方が異なっている。そして、日本語の「ちょっと」が、複数のコミュニケーション機能を有することがわかる。

1.2. 日本語の「ちょっと」に関する対照研究

一方で、中国語との対照分析による研究も、いくつか確認できる。

先の彭（2004）では、日本語の「ちょっと」と中国語の表現との比較も行っている。これは、彭氏における「ちょっと」の7つの分類からである。そして、下記のような結論を述べている。

「中国語では、“一下”“一会儿”、“一点儿”など“一”を使用することが多い。“一下”“一会儿”は主として時間の短さを示し、“一点儿”、“有点儿”は主として数量の少なさ（程度）を示すもので、強意（暗示的な強調）に用いられることは少ない。」（p.176）

謝（2007）は、動詞や形容詞との共起制限について、「ちょっと」と“有点”の機能を考察している。さらに、モダリティの視点から、「ちょっと」と“有点”の表す程度の違いについてもあわせて考察している。

また、辻（2011）では、日本語と中国語の対照分析から、日本語学習者の「ちょっと」の習得について考察を行った。その際に、岡本・斎藤（2004）の用法を参考にした。そして、分析を通して、「ちょっと」の用法には、中国語の“一下”、“一点”、“有点”、“不太”、“喂”、“不要”などが当てはめられることがわかった。

しかし、岡本・斎藤氏の用法は、「依頼や、希求、指示行為の負担をやわらげる」など、「ちょっと」の特定の機能を取り上げたものである。この用法のみで、「ちょっと」の日中対照分析の特徴を明らかにするのには限界がある。異なる用法における分析も求められる。そこで、本研究では、中国語との対照分析を行う上で、彭（2004）の分類を参考にすることとした。彭氏の分類は、「話者の適応力」、「話者の行為」、「話者の判断」、「話者の評価」、「勧誘」、「依頼希求」、「注意喚起」のように、「ちょっと」の機能を包括的に捉えたものである。このことから、本研究の結果により、中国語母語話者が「ちょっと」の機能を、全体的に理解することが期待できる。

2. 研究目的

以上のように、日本語の「ちょっと」の対照分析に関する文献は少ない。そして、辻（2011）

では、このテーマについて研究を行ったが、「ちょっと」の日中対照分析の特徴を明らかにするには、異なる用法における分析も必要であると言える。また、本研究の結果は、中国語母語話者の「ちょっと」の習得にもつながるものである。

本研究のリサーチクエスションは、「日本語の『ちょっと』には、どのような中国語表現が対応するのか。また、そこに意味の類似や相違があるのか」、そして、「中国語母語話者に対し、どのように『ちょっと』を指導すべきか」というものである。

本研究の目的は、「まず、彭（2004）の分類において、日本語の『ちょっと』の機能と、それに対応する中国語の表現を明らかにする。その上で、日本語と中国語の間で、意味の類似点や相違点が存在するのかを検討する。そして、その結果に基づいて、日本語の『ちょっと』の指導への提案を行う」というものである。

また、本研究は、日本語の「ちょっと」とそれに対応する中国語表現の特徴や問題を理解するために行い、仮説を生成することを目的とした探索的研究である。

3. 研究意義

対照分析は、「誤用の予測が外れる」、「発達上の誤りもある」という問題から、現在では、第二言語習得研究において、誤用分析、さらには中間言語が注目されている。しかし、辻（2013）では、対照分析の意義として、目標言語における学習困難点の発見といった、「回避の予測」を主張している。本研究の結果において、対照分析の実用性を示すことは、対照研究の発展に寄与するものであると考えられる。このことから、学術的な意義があると考ええる。

また、対照分析の結果から、中国語母語話者における「ちょっと」の習得上の阻害要因が示され、それを教授上のポイントとすることが可能である。学習者に対して効果的な指導を行うことができる。このことから、言語教育における実践的な意義があると考ええる。

4. 研究方法

以下、対照分析における研究方法を示していく。

4.1. 対照研究のタイプ

本研究では、「ちょっと」について、対訳上で対応関係にある表現をつき合わせ、その類似と相違を整理する。井上（2002）によれば、以下のように、対照研究には2つのタイプの研究があるという。本研究では、前者の「対応記述型」を採用する。

I 「二つの言語の類似と相違を共通の枠組みのもとで整理して記述する」ことに重点を置く〈対応記述型〉の研究

II 「二言語間の類似と相違の背景にある一般的な原理や傾向性について考える」ことに重点を置く〈類型設定型〉の対照研究

このうち、I について、下記のように説明している。

〈対応記述型〉の対照研究の典型は、対訳上対応関係にある表現をつきあわせて、その類似と相違を共通の枠組みの中で整理するというものである。(p. 4)

言語教育において、〈対応記述型〉の対照研究で提供される『言語間の類似と相違』に関する情報は、学習者が第二言語を習得する上で何が阻害要因／促進要因になりうるかを考えたり、誤用の背景や教授上のポイントを考えたりするための参考情報として有益である。(p. 7)

また、張 (2011) は、対応すると考えられる目標言語の形式と母語の形式について、「1 対 1」、「多対 1」、「1 対多」、「多対多」の 4 タイプに分類している。この類型から言えば、本研究は、「1 対多」のケースになる。つまり、日本語の「ちょっと」に対して、複数の中国語の表現が存在する。

4. 2. 分析手法

本研究では、対照分析を行うにあたって、彭 (2004) における「ちょっと」の分類を参考にする。なお、彭氏の研究では、日本語の「ちょっと」と中国語の表現との比較も行われている。そのような意味で、本研究は、彭氏における「ちょっと」の対照研究を発展させるものであると言える。

また、北京日本学研究センターの「中日対訳コーパス」を利用し、「ちょっと」という表現を含む日本語原文と、それに対応する中国語訳文を検索した。その結果、計 488 件の日本語の「ちょっと」の表現と、それに対応する中国語表現を確認した。さらに、このうち、話し手の発話における「ちょっと」の例文のみを抽出し、説明文によるものは除いた。かつ、彭氏の 7 つの機能に当てはまると考える例文のみを抽出した。その結果、計 150 件の「ちょっと」の例文を、分析の対象とすることとした。

また、分析する例文については延べ語数ではなく、異なり語数を採用することとした。例えば、“等一下”という表現が 2 件以上あった場合は、1 件のみとした。なお、コーパスの例文において意味の通らない表現については、筆者により一部修正している。

以下、日本語の「ちょっと」の機能に対応する中国語の表現を取り上げていく。また、日本語と中国語の間で、意味の類似点や相違点が存在するのかを検討する。その際に、各機能において、「少し」という本来の意味と、1 節で述べた彭氏の「和らげ」と「暗示的な強め」という視点から分析を行いたい。

5. 研究結果

以下、それぞれの機能について、対照分析を行っていく。

5.1. 話者の適応力

話者の適応力では、計 5 件の中国語の表現の例が確認できた。それぞれ、“不大”（1 件）、“有些”（1 件）、その他（3 件）という中国語の表現による対応となっている。たとえば、下記のような例文である。

- （1）それはちょっと具合わるいわよ、いくらなんでも。「冗談じゃない。俺がその家に行って直談判してきてやる」って彼はすごく怒って言ったわ。『野火』
那毕竟不大合适，不管怎么说。“这可不是儿戏，我直接找那家摊牌去！”
- （2）それで何とも勝手な話ですけど、電話ではちょっと都合が悪いし、お目に懸れば大変好都合なんです、……………どうでしょうか？『痴人の愛』
打电话有些不方便，如果能当面谈那就太好了……把情况搞清楚以后能不能到大森来一趟呢？
- （3）二階に上ってきてよ。私、今ちょっと手が放せないの。『ノルウェイの森』
上二楼！我现在脱不开手。

以上のように、話者の適応力では、“有些”や“不大”などの中国語の表現による対応がみられるが、訳さない形もみられる。

“不大”は、副詞として「あまり～ではない」という意味を表す。程度の少なさを表し、添加することにより、表現を柔らかくすることができる。また、“有些”は、副詞として「少し」や「いくらか」のような、程度の少なさを表し、同じく、添加することにより、表現を柔らかくする。

しかし、話者の適応力では、（3）の例文のように、副詞としての「ちょっと」を訳さない場合もみられる。

5.2. 話者の行為

話者の行為では、計 40 件の中国語の表現の例が確認できた。それぞれ、“一下”（6 件）、動詞の重ね型（5 件）、動量詞（4 件）、量詞（3 件）、“一点”（2 件）、“一会儿”（2 件）、“不大”（1 件）、“稍”（1 件）、“有些”（1 件）、その他（15 件）¹⁾などの中国語の表現が対応している。上位の件数の中国語で言えば、下記の例文がそれである。なお、本研究では、“一下”を動量詞から独立して扱うこととする。

- （4）今日ちょっと田中のところに寄って参りますから、一時間遅くなります。『布団』
今天要到田中那里去一下，晚一小时回来。
- （5）ただ私、ちょっと考えてたのよ。共同生活をするのってどんなだろうって。そしてそれはつまり……。『ノルウェイの森』
不不，不是那样的。只是想想，想集体生活是什么样子，我是说……。

- (6) すぐお暇しますから、お構いしないで下さい。梶さんにほんのちょっとお目にかかればいいんです。『あした来る人』

我马上告辞，请别客气。只要见一眼梶先生就可以了。

以上のように、話者の行為では、“一下”、動詞の重ね型、動量詞などの中国語の表現による対応がみられる。

“一下”は、動詞の後ろに用いて、「ちょっと～する」、「ちょっと～してみる」のように、「試しにやってみる」という意味を付加する。“看一下”（ちょっと見てみる）、“打听一下”（ちょっと聞いてみる）といった具合である。その行為について、量的に少ないことを表し、添加することにより、表現を柔らかくすることができる。

動詞の重ね型は、“想想”（ちょっと考える）のような、一音節の動詞による AA 型があった。他にも、“去去”（ちょっと行く）や“看看”（ちょっと見る）などの例がみられた。動作・行為を表す動詞を重ね、「ちょっと～する」、「試しに～してみる」といった意味を表している。行為の回数や継続時間が少ないことを表し、語気を和らげる働きがある。先の“一下”と同じような意味を表している。

動量詞は、“次”（回）や“趟”（度）のように、動作の回数を表す単位として使われるものである。たとえば、“我去一趟邮局”（ちょっと郵便局に行きます）という表現は、行き来する回数を表している。動量詞では、“见一眼”（ちょっとお目にかかる）、“摔了一跤”（ちょっと転んだ）、“尝试一番”（ちょっと試す）などの例がみられた。このように、動作の回数を限定して示すことで、語気を和らげている。

なお、その他の表現では、2 件の例文が確認できた。「ちょっと失礼します」と「ちょっと失敬します」であり、中国語の“对不起”として、「ちょっと」は訳されていなかった。

5.3. 話者の判断

話者の判断では、計 26 件の中国語の表現の例が確認できた。それぞれ、“有点”（6 件）、“一点”（3 件）、“有些”（4 件）、“不大”（1 件）、“稍”（1 件）、動詞の重ね型（1 件）、“很”（1 件）、“相当”（1 件）、その他（8 件）などの中国語の表現による対応であった。下記の例文がそれである。

- (7) ねえ、私たちそろそろ部屋に戻った方がいいんじゃないかしら。直子のことがちょっと心配になってきたから。『ノルウェイの森』

噢，我们差不多该回房间了，有点放心不下直子。

- (8) なにね、薪がちょっと燃えただけなんです。ボヤ、とまでも行きません。『斜陽』

没什么，只是烧掉了一点劈柴。连小火灾都算不上。

- (9) それで、あれどうしたんだろうってちょっと不思議に思ったの。『野火』

我有些纳闷儿。怎么回事呢？

以上のように、話者の判断では、“有点”、“一点”、“有些”などの中国語の表現による対応がみられる。

“有点”は、副詞として「少し、少々」、「どうも」といった意味を持ち、望ましくないことについていうことが多い。“他的情绪有点儿紧张”（彼はちょっと緊張している）のように、“有点”の後ろに続く動詞は、消極的・否定的な意味のものが多い。“有点”は、本来の少しの意味により、語気を和らげられる。そればかりか、そのネガティブな行為の程度が高いという意味を含み、彭氏の言う「暗示的な強め」をも表すことができる。

“一点”は、「少し」、「ちょっと」の意味を持ち、わずかな量を表す。すなわち、比較したその差が「わずか」であるといった差異を表す。また、このことから、語気を和らげることができる。“有点”と“一点”を比べた場合、“我觉得有点儿冷”（ちょっと寒く感じる）が主観的な感覚となるのに対し、“今天比昨天冷一点儿”（今日は昨日よりちょっと寒い）は、客観的な比較となる。そのため、“一点”による中国語の表現からは、話し手の主観性を表す「暗示的な強め」は、表現することはできない。

“有些”は、副詞として「少し」や「いくらか」の意味を表すが、たとえば、“有些失望”（ちょっと失望した）のように、そのネガティブな行為の程度が高いという意味を含む。“有点儿失望”（ちょっと失望した）の表現と同じく、「暗示的な強め」を表すことができる。このことに関して、時（2015）は、下記のように述べている。

「“有点”“有些”は好ましくないことを描写する意味機能を持っている。即ち、この二語は表される程度性は低いものの、消極的な評価にふさわしく、好ましくない状態や動作に対しては鮮明な描写性を有しているということである。」（p. 71）

5.4. 話者の評価

話者の評価では、計 33 件の中国語の表現の例が確認できた。それぞれ、“有点”（8 件）、“不大”（4 件）、“太”（4 件）、“有些”（2 件）、“一点”（1 件）、“挺”（1 件）、“相当”（1 件）、その他（12 件）などの中国語の表現による対応であった。上位の件数の中国語で言えば、下記の例文がそれである。

- (10) 「あの人はちょっとここがおかしいのよ」とレイコさんは言って指の先で頭を押さえた『ノルウェイの森』

那人这地方有点小故障。玲子用手指戳着脑袋说。

- (11) ちょっとなき声が変わる。『あした来る人』

叫声不大对头啊！

- (12) ゆっくりまわりの方から消していくんだ。そうすればそんなにくしゃくしゃにならないですむ。それじゃちょっとひどすぎる。『ノルウェイの森』

从四周开始慢慢熄，那就不至于把烟头弄得焦头烂额的。你这吸法太残忍了。

以上のように、話者の評価では、“有点”、“不大”、“太”などの中国語の表現による対応がみられる。“有点”は、「少し、少々」、「どうも」といった意味を持ち、“这种饼干有点甜，我不爱吃”（このビスケットはちょっと甘いので、きらいだ）のように、望ましくないことについていうことが多い。

“有点”は、ある基準や期待値と比べ、マイナスのズレがあると感じることを表す。話者の評価の機能は、「悲しい」や「暑い」といった、人のネガティブな感情や感覚を表す、形容詞・形容動詞を範疇とする。そのような意味で、「暗示的な強め」をも表せる“有点”が、多用されていると考えられる。

“不大”は、“不大好看”（あまりきれいでない）のように、「あまり～ではない」という意味を表す。程度の低さを表し、添加することで、表現を柔らかくすることは可能である。しかし、話し手の客観的な評価を表すにとどまっており、「暗示的な強め」まで表現することができない。

“太”は、「あまりにも～すぎる」、「ひどく」、「はなはだしく」のように、程度が著しいことを表す。また、否定形において、不満のニュアンスを表し、文末に語気助詞の“了”を付け、“太糟糕了”（ひどくまずい）のように、一層の強調を表す。日本語の原文の例文も、すべて「ちょっと～すぎる」という表現であった。この場合、本来の程度大の意味を表すものとして、“太”で訳される。ここでは、「暗示的な強め」における、話し手のネガティブな感情における程度の高さは表せるが、あからさまな表現となり、むしろ強い表現であると言える。

5.5. 勧誘

勧誘では、計5件の中国語の表現の例が確認できた。すべて、「ませんか、ましょう、ない」などのムードの表現であった。それぞれ、動詞の重ね型（2件）、動量詞（1件）、“一会儿”（1件）、その他（1件）という中国語の表現による対応となっている。たとえば、下記のような例文である。

(13) 戸外をちょっと歩きませんか。『あした来る人』

到外边走走好么？

(14) ちょっと歩きましょうか。『あした来る人』

走几步吧？

(15) まあちょっと坐りましょう。あのね、今晚は私の言う通りにしてね、わたし、ちゃんと考えているんだから……。『青春の蹉跎』

我们先坐一会儿。今晚上你都得听我的，我都安排好了……。

以上のように、勧誘では、動詞の重ね型、動量詞、“一会儿”などの中国語の表現による対応がみられる。

動詞の重ね型は、“我们休息休息吧”（ちょっと休みましょうよ）のように、「ちょっと～す

る／試しに～してみる」といった意味を表す。動作が短時間であることや、軽い気持ちを表し、語気を和らげる働きがある。そのような意味で、相手への勧誘を表しやすいものと考えられる。

動量詞では、“几步”（ちょっと歩く）のように、“几”（いくつ、いくら）をともなう形がみられた。数を限定する言い方により、語気を和らげることができる。このことから、相手への勧誘を表しやすいと言える。

“一会儿”は、「ちょっとの間」、「しばらく」の意味を表す。“休息一会儿吧”（ちょっと休みましょう）のように、その行為が、わずかな時間、ほんのちょっとの時間であることを表す。このことから、語気を和らげることが可能である。また、相手への勧誘を表しやすいものと言える。しかし、あくまでも行為の時間のことを言っており、「暗示的な強め」の意味は含まれない。

5.6. 依頼希求

依頼希求では、計 27 件の中国語の表現の例が確認できた。そのうち、“一下”（7 件）、動詞の重ね型（5 件）、動量詞（5 件）、量詞（3 件）、“一会儿”（1 件）、“有点”（2 件）、その他（4 件）などの中国語の表現による対応となっている。下記の例文がそれである。

(16) あーちょっと、筆を貸してくれませんか。『破壊』

啊，对不起请把笔借用一下。

(17) ちょっと横を向いてみてくれないかな。『ノルウェイの森』

侧过脸看看可好？

(18) そうですか。それならすぐに帰ってもらえるでしょう。とにかくちょっと来てもらえませんか。『青春の蹉跎』

是吗？那么你马上就会回来的。总之，我们请你去一趟。

以上のように、依頼希求では、“一下”、動詞の重ね型、動量詞などの中国語の表現による対応がみられる。

“一下”は、動詞の後ろに補語として用いて、「ちょっと～する」、「ちょっと～してみる」といった意味を表す。「試しにやってみる」という意味から、その行為に対する取り組みの度合いが高くないことを表す。また、それにより、語気を和らげることができる。さらに、“有点”や“有些”とは異なり、“一下”は動作動詞と共起しやすい。このことから、相手の行為への依頼希求を表しやすいものと考えられる。しかし、“一下”をともなう表現自体からは、真に程度が高いことを表す「暗示的な強め」の意味は含まれない。

動詞の重ね型は、“给我看看”（ちょっと見せてください）のように、「ちょっと～する」、「試しに～してみる」といった意味を表す。動作が短時間であることや、軽い気持ちを表し、語気を和らげる働きがある。さらに、動作や行為を表す動詞に使われることから、相手の行

為への依頼希求を表しやすいと考えられる。

動量詞は、たとえば、“请再说一遍”（もう一度言ってください）のように、動作の回数を表す。また、動作の回数を限定して示すことで、語気を和らげている。なお、“问一遍”（ちょっと聞く）、“去一趟”（ちょっと行く）、“见一面”（ちょっと会う）などの例文がみられた。

「数詞＋動量詞」で表されるものを中心に、相手の行為への依頼希求を表しやすいと考えられる。

5.7. 注意喚起

注意喚起では、計 14 件の中国語の表現の例が確認できた。それぞれ、“一下”（4 件）、“喂”（3 件）、動詞の重ね型（4 件）、“一会儿”（1 件）、その他（2 件）などの中国語の表現による対応であった。

(19) ちょっと、こっちへおいで。『雁の寺』

到这儿来一下！

(20) ちょっと！靴ん中へ砂が入っちゃって、歩けやしないよ。『痴人の愛』

喂！沙子进到鞋里，没法儿走路了。

(21) 幸夫ちゃん。ちょっと、幸夫ちゃん。あんた、どこ行くの。電車に乗らないの。なぜ乗らないの。『黒い雨』

幸夫，停一停。幸夫，你上哪儿去？不坐电车吗？怎么不坐车呢？

以上のように、注意喚起では、“一下”、“喂”、動詞の重ね型などの中国語の表現による対応がみられる。

“一下”では、“来一下”（ちょっと来てください）のように、相手呼び寄せるものがほとんどであった。「ちょっと～する」という意味から、語気を和らげている。

“喂”は、「おい」、「もしもし」といった意味を表す。たとえば、“喂，你的东西掉了”（ちょっと、ものが落ちましたよ）、“喂！快过来呀！”（ちょっと、早く来いよ）のように、相手への呼びかけを表す。ただし、“喂”という表現は、中国語では丁寧な表現であるとは言えない。そして、注意喚起としての「ちょっと」が、本来の程度小の意味から派生したことを考えると、“喂”は、これよりも強く、やや命令的な口調に偏った表現になると言える。程度の少なさの意味はもちろん、和らげの意味も表せない。

動量詞では、“等等／等一等”（ちょっと）、“停一停”（ちょっと）のように、「待ってください」の意味で、相手の行為を止めさせるものがあつた。動作が短時間であることを表し、語気を和らげている。

6. 総括、及び提言

本研究では、彭（2004）の分類において、日本語の「ちょっと」の機能と、それに対応す

る中国語の表現を明らかにした。そして、日本語と中国語の間で、意味の類似点や相違点が存在するのかを検討した。まず、各機能における、主な中国語表現による対応は、表1の通りである。

表1 各機能における主な中国語表現による対応

	日本語	中国語訳
① 話者の適応力	<u>ちょっと</u> 具合が悪い <u>ちょっと</u> 都合が悪い <u>ちょっと</u> 手が放せない	不大： <u>不大</u> 合适 有些： <u>有些</u> 不方便 訳なし：脱不开手
② 話者の行為	<u>ちょっと</u> 寄って行く <u>ちょっと</u> 考える <u>ちょっと</u> お目にかかる	一下：去 <u>一下</u> 動詞の重ね型： <u>想想</u> 動量詞：见一眼
③ 話者の判断	<u>ちょっと</u> 心配になる <u>ちょっと</u> 燃えた <u>ちょっと</u> 不思議に思う	有点： <u>有点</u> 放心不下 一点：烧掉了 <u>一点</u> 有些： <u>有些</u> 纳闷儿
④ 話者の評価	<u>ちょっと</u> おかしい <u>ちょっと</u> 変だ <u>ちょっと</u> ひどすぎる	有点： <u>有点</u> 小故障 不大： <u>不大</u> 对头 太： <u>太</u> 残忍了
⑤ 勧誘	<u>ちょっと</u> 歩きませんか <u>ちょっと</u> 歩きましょうか <u>ちょっと</u> 坐りましょう	動詞の重ね型： <u>走走</u> 好么？ 動量詞：走 <u>几步</u> 吧？ 一会儿：先坐 <u>一会儿</u>
⑥ 依頼希求	<u>ちょっと</u> 筆を貸してくれませんか <u>ちょっと</u> 横を向いてみてくれないか <u>ちょっと</u> 来てもらえませんか	一下：把笔借用 <u>一下</u> 動詞の重ね型：侧过脸看看好？ 動量詞：请你去 <u>一趟</u>
⑦ 注意喚起	<u>ちょっと</u> 、こっちへおいで <u>ちょっと</u> ！歩けやしないよ 〇〇さん、 <u>ちょっと</u>	一下：到这儿来 <u>一下</u> ！ 喂： <u>喂</u> ！没法儿走路了 動詞の重ね型：〇〇， <u>停一停</u>

以上のように、「ちょっと」は多義的な意味を持っており、さまざまな中国語表現が対応する。「ちょっと」の意味を表す際に、たとえば、わずかな時間に焦点を当てたい場合は“一会儿”、動作の試みに焦点を当てたい場合は、動詞の重ね型（“说说”など）のように、複数の中国語の表現が、補い合って対応しているものと言える。また、「ちょっと」は、“一点”でも表されるし、“太”でも表される。これらの中国語の表現は、必ずしも類義的關係ではないところが特徴的である。

「ちょっと」の意味と比較した場合、中国語の“有点”、“有些”、“一点”、“一会儿”、“一下”

などの表現も、程度が少ないことを表し、語気を和らげられる。一方で、“看看”などの動詞の重ね型や、“(去一)趟”などの動量詞は、文法機能から、動作の程度が少ないことを表し、語気を和らげられる。このようなことから、日本語の「ちょっと」と、これらの対応する中国語との間で、意味上の類似点がみられる。

しかし、「ちょっと」は、本来の少ない意味や、語気の和らげだけでなく、「ちょっと難しい」のように、ネガティブな内容における程度の高さも表す。この場合、“一点”、“一会儿”、“一下”や、動詞の重ね型、動量詞などでは、これを表現するのは難しい。また、“太”でその程度の高さを表せるが、直接的な表現となってしまう。ただし、“有点”と“有些”については、このような「暗示的な強め」の意味も表すことはできる。動作動詞と共起しないなどの文法的な制約はあるが、「ちょっと」の意味に近いと言える。この点で、「ちょっと」と、それに対応する中国語との間で、意味上の相違点がみられる。

最後に、本研究の結果に基づき、日本語の「ちょっと」の指導における提案を行いたい。対照分析の点から、「ちょっと」が有する、ネガティブな内容における程度の高さの意味は、習得上、見落としてしまう恐れがある。同じような意味の“有点”や“有些”でも、文法的な制約がある。そのため、中国語母語話者が習得する上での阻害要因となりえる。

実際に、この意味を含む「ちょっと」の表現は、さまざまなコミュニケーションで用いられている。たとえば、「ちょっと難しいですね」といった断りであったり、「ちょっと良くないですね」といった注意であったりする。これらは、ただ程度が少ないことを表しているわけではない。聞き手への直接的な表現を避けるために、このように言っている。また、学習者がコミュニケーションを行っていく上で、重要な表現となってくる。したがって、中国語母語話者に「ちょっと」の表現を指導する際は、このような暗示的な強めの意味も教えることが望ましい。「ちょっと」における教授上のポイントになってくるであろう。そして、日本語教育の現場では、語彙導入やロールプレイなどの指導でのタイミングが考えられる。

今後の課題としては、「ちょっと」とそれに対応する中国語表現の例が少ないことが挙げられる。本研究の結果により、話者の評価や依頼希求などの機能について、日本語表現と中国語表現との対応関係を、一般化することには限界がある。今後より多くの例を収集し、本研究における分析を確実にする必要がある。そして、その研究の成果を、日本語教育の現場への応用につなげたい。

注

- 1) 「その他」の例文では、翻訳において対応する語が省略されているものや、中国語では直接対応する表現が存在しないため、意味的に吸収された意識のものが挙げられる。

参考文献

- 井上優(2002)『『言語の対照研究』の役割と意義』『対照研究と日本語教育』(くろしお出版)
- 岡本佐智子・斉藤シゲミ(2004)「日本語副詞『ちょっと』における多義性と機能」『北海道文教大学論集』(5)、pp. 69-71
- 時衛国(2015)「“有点”“有些”の幾つかの用法について」『外国語研究』(48)、pp. 51-80
- 謝平(2007)「日本語の『ちょっと』と中国語の“有点”について」『ことばの科学』(20)、pp. 85-100
- 張麟声(2011)『中国語話者のための日本語教育研究入門 新版』(日中言語文化出版社)
- 辻周吾(2011)「日本語学習者の副詞『ちょっと』の習得について—中国人日本語学習者に対する指導方法をめぐって—」『NEAR conference proceedings working papers 2011』、pp. 1-18
- 辻周吾(2013)「日本語教育のための対照分析」『日本語教育方法研究会誌』20(1)、pp. 46-47
- 辻周吾(2022)「日本語の『ちょっと』の意味・用法に関する一考察」『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』35(1)、pp. 65-79
- 中道真木男(1991)「副詞の用法分類—基準と実例—」『日本語教育指導参考書—副詞の意味と用法—』(大蔵省印刷局)
- 彭飛(2004)『日本語の「配慮表現」に関する研究—中国語との比較研究における諸問題—』(和泉書院)
- 牧原功(2005)「談話における『ちょっと』の機能」『群馬大学留学生センター論集』(5)、pp. 1-11.

例文の出典

「中日対訳コーパス」(北京日本学研究中心)

研究会 報告

2025 年度 京都外国語大学 日本語・日本語教育研究会／カルチュラル・スタディーズ研究会

第 36 回 国際言語文化学会 日本語・日本語教育研究会

開催日：2025 年 11 月 30 日（日）（オンライン開催）

宇都宮 佳穂（流通科学大学）

「外国につながる子どもへの日本語支援：文献研究からみえる課題と今後の展望」

山崎 誠（流通科学大学）

「留学生の日本語音声教育の実践―俳句の言語学的考察と応用―」

辻 周吾（流通科学大学）

「実践報告：日本企業への就職を目指す留学生のためのビジネス日本語教育」

清水 泰生（同志社大学）

「日本語教師養成講座の指導内容の変遷と課題、将来への展望―理論科目を中心に―」

日本語・日本語教育研究会／カルチュラル・スタディーズ研究会 第 7 回合同研究会

開催日：2026 年 2 月 21 日（土）（オンライン開催）

王梓洋（京都言語文化学院）

辻 周吾（流通科学大学）

「日本語の『ちょっと』とそれに対応する中国語の表現―日本語教育への応用に向けて―」

堀口朋亨（国士舘大学）

影浦亮平（千葉商科大学）

「登山鉄道による観光空間の再編とアクターの新結合：生駒山と箱根におけるナラティブの変容を中心に」

『国際言語文化学会 日本学研究』原稿執筆規定

京都外国語大学日本語・日本語教育研究会、カルチュラル・スタディーズ研究会では、年1回、研究会誌『国際言語文化学会 日本学研究』を刊行する。

1. 執筆資格：

その年度の研究会において口頭発表することを原則として条件とする。

2. 原稿の種類：

1)原稿の種類は以下のとおりで、編集委員会が認めたものとする。

研究論文：日本学または文化の研究および関連領域について、新規性・独創性のある研究、かつ、論証性のあるもの。

2)すべての論文は「投稿論文」として扱い、2名の査読者による査読を行う。査読に当たった者の一覧は公開するが、個々の論文における査読者の氏名は公開しない。

3)論文は未発表のものに限る。他誌に同時に投稿していることがわかった場合は不採用とする。ただし、未公開の修士論文、博士論文の一部は投稿できる。

4)翌年3月発行の会誌に掲載されるものの締め切りは1月の第1日曜日とする。

3. 原稿の分量等：

1)論文は、原則として20ページまでとする。

2)図表などは上記の枚数に含まれるものとする。

3)締切日を過ぎた原稿は受け付けない。

4. 要旨などについて：

論文の初めに英語の要旨をつけること。要旨の分量は800字までとする。また、タイトルは、欧文和文両方を必要とする。

5. 校正：

原則として、査読以後の文章の訂正、加筆は認めない。ただし、査読者の指示があった場合に限り、その箇所を修正できる。

6. 原稿の採否：

編集委員会による査読によって締切日から約1か月で決定される。

7. 原稿の掲載：

当該号の投稿論文数、その他の事情により次号に繰り越す場合がある。その場合、編集委員会は投稿者に連絡し、協議するものとする。

8. その他：

必要な事項については、編集委員会の議を経て決定する。

9. 著作権について：

掲載原稿の著作権は、執筆者に帰属する。ただし、編集委員会は、掲載原稿を電子化し、インターネット公開・配布するための権利を有するものとする。

10. 原稿の送付先：

r_kageura@kufs.ac.jp（影浦）

国際言語文化学会日本学研究第11号

執筆者一覧

王梓洋	京都言語文化学院 専任講師
影浦亮平	千葉商科大学 基盤教育機構 准教授
辻周吾	流通科学大学 商学部 経営学科 准教授
堀口朋亨	国土舘大学 経営学部 経営学科 教授
村山弘太郎	京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 教授
森田卓哉	京都外国語大学 共通教育機構 講師

査読者

辰巳遼	京都外国語短期大学 キャリア英語科 講師
辻周吾	流通科学大学 商学部 経営学科 准教授
楊蕾	京都外国語大学 外国語学部 中国語学科 准教授
吉野孝介	京都外国語大学 国際言語平和研究所 客員研究員

『国際言語文化学会 日本学研究』第11号

令和 8 年 3 月 31 日 印刷

令和 8 年 3 月 31 日 発行

編 集	京都外国語大学日本語・日本語教育研究会 京都外国語大学カルチュラルスタディーズ研究会
連絡先	日本語・日本語教育研究会:r_kageura@kufs.ac.jp カルチュラルスタディーズ研究会:r_tatsum@kufs.ac.jp
発行所	京都外国語大学国際言語文化学会事務局 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
印 刷	株式会社 北斗プリント社

